

有島武郎の内部生命観

——その時間意識との係わり——

田 辺 健 二

有島武郎の小説の中には、いくつかの、象徴的・暗示的な時計のイメージが出てくる。たとえばそれは、次のようなものである。

マリー・アントワネットの寢殿にあつて、華麗なマンテル・ピースを飾つてゐる時には、その置時計は確かに動いてゐたに違ひない。花のやうなその皇后と、温雅なルキ第十六世とが濃やかな春をこめた陸言の間に、その時計の精巧な螺絲はゆる／＼とほぐれ、秒から分を刻み、分から時を刻んで、黄金の鈴を静かな夜の沈黙の中に穏かに鳴り響かしたものだらう。恐ろしいギロティンの斧の刃が、王家の誇りをさすがに最後まで捨てなかつた皇后の頸に、情け容赦もなく加へられた頃から、その時計は動かなくなつたと伝へられてゐる。

(「動かぬ時計」)

これは、短編「動かぬ時計」冒頭の一節である。王妃マリー・アントワネットの生命と共に、その動きを止めてしまつた置時計、それはすでに暗示的であると言つてよいであらう。この動かなくなつた時計、「どれ程熟練な時計師でもそれを元通り動くやうにする事は出来なかつた」という置時計を、日本の国家学者R教授がその由来のおもしろさに惹かれて日本に持ち帰る。R教授は、日本の学界においては、その第一人者として自他ともに許している程の学者である。ところが、ここにC博士という新進の学者がいて、R教授に対する強力な反駁文を発表する。その反駁に対してどう応えるかを苦慮しているのが、この小説の内容である。深まってくれ、古い、身体の不調、枯渇する気力。R教授は、すでに往年のR教授ではない。気鋭のC博士の徹底した論理、破綻のない理路は、首肯させずにはおかない力をもってR教授に迫つて来ている。R教授は屈服しかかつていないのだ。そういうR教授の目に、マリー・アントワネットの時計はどのように映つてゐるのか。

埃といふ連想から教授はふとマリー・アントワネットの置時計の方を見た。書齋の中はきちんと教授の趣味に叶つて隅から隅まで掃除が行き届いてゐて、時計にも埃がたまらずに美しく光つてゐた。実は一年程前から教授はこの時計に対して奇怪な一つの妄想を抱くやうになつてゐたのだ。それはその時計がいつか昔の通りに動き出すに違ひないといふ想像だつた。実際時計は今にも動き出して、凜々と鳴る金の鈴に、昔の榮華を語り出しさうに思はれた。折毎にそれを見詰め慣れた彼には、ます／＼さう思はれた。時といふものを刻み出すべき時計が、凝然として止つてしまつてゐるのを見るのは恐ろしくも神秘的なものであつた。彼はその時計を見詰めながら、やゝ閑散になつた暇にまかせて、色々な空想を抱いて見た。さういふ折に彼は時々その時計から突然「死」といふものをびつたり考へさせられて思はずぎよつとする事があつた。自分も活きなくなつてしまふ時があるのだ。総ての学説も、家庭の中の幸不幸も、今まで持ち続けて来た名誉も、わく／＼した気持の旋風に吹きまわられて眼の前で消え失せてしまひ、一歩々々死に近づいて行く彼の姿だけが惨めにも想像された。それは冷やかに取り返し難く彼の氣力を沮喪させた。それは老境に進んで、来世の安心もなく、現在に自信の壊れかけた自意識の強い人ばかりが、誰にも語り得ないで、独り淋しく味はねばならぬ物凄さだつた。

この思はしい心の経験は、R教授に時計の動くのを益々願はせるやうになつた。何かいふ事が起る前兆としてその時計は屹度動き出すに違ひないと思ふやうになつた。

「時といふものを刻み出すべき時計が、凝然として止まつてしまつてゐる」のは、確かに「神秘的」であり、皮肉で逆説的なイメージでもある。しかし、それ

よりも、R教授にとっては、「死」を連想させる恐ろしい象徴でもあるのだ。まして、それがマリー・アントワネットの死と同時に動かなくなったという時計であつてみれば、なおさらのことであろう。そして、そんなものを、自ら買い求めて来たのも、また運命の皮肉といわなければならない。この「動かぬ時計」は、R教授の「死」の象徴である。生理的な死、学問的な死、それを暗示するのが、この「動かぬ時計」である。だとすれば、ここに一つの妄想が生まれるのも、また自然の成り行きであろう。「その時計がいつか昔の通りに動き出し」、「薬々と鳴る金の鈴に、昔の栄華を語り出」すというのは、いかにもロマネスクな空想である。そこに、R教授の再生の願ひがある。しかし、それが妄想にすぎないこともまた真実である。「どれ程熟練な時計師でもそれを元通り動くやうにする事は出来なかつた」時計が、百年余の後に再び動き始めるとすれば、それは現代の奇蹟であろう。しかし、現代に奇蹟は起りえない。この小説の結末は、次のやうに結ばれている。

彼は然し結局C博士の反感に同感し屈服しないではゐられない事を認めた。彼は自分の思考力が何んとなく衰へて昔のやうにきび／＼働いてくれないのを感じた。何時ともなく段々失はれた氣力が、二度と彼には帰らないのを痛々しく知つた。彼は臆て打ちくだかれたやうに眼を閉じて有罪の宣告でも受ける前のやうに、やき／＼と胸に突き上げて来る不安を強ひて抑へ付けようとした。

(中略) さうしたままで若干の時がたつた。突然午砲が雪晴れの空に響き互つて、賑やかな汽笛の音が遠くの工場から合唱のやうに伝はつて来た。隣り近所でもボン／＼時計の十二時を打つ音が勇ましく聞こえた。

R教授は物憂げな眼を開いて、もう一度振返つてマリー・アントワネットの置時計を見た。金縁を取つた雪白の指針盤は重々しいながら何処までも優美な時計全体の塊マッスの中央に、ブルトーに抱きすくめられたプロサーピナのやうに抱きすくめられてゐた。ダマスクの七首を思はせる精鋼の指針は凝然として動かななかつた。短針よりも一寸おかれて十二時の少し手前を指してゐる長針を見てると、澄み互つた十二の音が、時計の腹に仕掛けてある黄金の鈴から、今にも凜々と鳴り出しさうに思はれた。

然しダマスクの七首を思はせる精鋼の指針は凝然として動く事をしなかつた。

やはり、この時計は「凝然として動」かないのだ。圀りには、正午を告げるドンや汽笛やボン／＼時計が「勇ましく」鳴り渡つてゐるのに、マリー・アントワネットの時計、いやR教授の時計は動かない。外部の世界は生き生きと活動してゐるのに対して、R教授の内的世界は、もはや活動しなくなつてゐる。外的・物理的時間はよどみなく流れて行くのに、R教授の内的・心理的時間、ベルグソンのいわゆる純粹持続は、その流れを止めてゐるのである。R教授の内部生命、それを象徴するのがこの時計のイメージである。

この短編「動かぬ時計」の例は、動かなくなった時計が作品全体を象徴するイメージとして提示され、それが作品の標題にまでもなつてゐる点で、時計のイメージがきわめて大きな役割を担つてゐると言えるが、それほどではないにしても、やはり重要なイメージとして時計が描かれてゐる作品がある。

それからやゝ暫く僕は生きながら死んで居た、死にながら生きてゐた。突然傍で鳴つた会社の汽笛に愕然として時間の世界に生れ出て、時計を見るともう十一時半だつた。然しその時計は昨日から巻かれなかつたので、時間の世界に住んでゐなかつた。それに氣が付くと、既にY子を見失つてしまつた僕は、せめて肉身のY子を見失ふまいとして又停車場に馳せもどつた。

これは「宣言」の一節である。婚約者Y子を親友のBに奪われたことを知つたAの激しい悲しみを描いた部分である。この時計も止まつてゐる。「動かぬ時計」である。熱愛の対象たるY子を突然失つたAの、心中に広がる空白感、激しい悲しみと絶望が、内なる時計を止めてしまつたのだ。先のR教授の場合とは様々な点で異なるが、根本的・本質的には同一であるといふであらう。Aの内的時間・純粹持続、すなわち内部生命は、いま流れること止めてしまつてゐる。これは、R教授の場合と基本的には同じ状態であると言つてよい。この「宣言」の結末は次の如くである。

僕の机の上には、今、君等の手紙と共に、使い古した時計が置いてある。時計は持主に同情するやうに十一時半でとまつて居る。馬鹿な奴だ。だが何んだか可哀さうな奴だ。

僕は、今、不思議にも、この時計のゼンマイを巻く氣になれない。心よ。忍んで待て。

黎明の空の端に、二月二十三日の太陽が今昇り始めた。僕はそれを見つめて居る。

R教授の時計が、「どれ程熟練な時計師でもそれを元通り働かすには出来なかつた」時計であるのに対して、Aの時計はゼンマイを巻けば動くのである。その点に違いがある。Aの純粹持続・内部生命は、いま一頓座をきたして停つてゐる。しかし、それは、いつか再び流れ始めることが予想されてゐる。その時、Aは新しく生れ交つてゐるのである。

いま一つの例を「迷路」に見ることができる。

三時頃Kは又眼を開いた。Aは唇をしめしてやつた。

「時計は……君にやる……直せ……動く……それから君はフロラにな……人間は……人間は……それから……それ……」

Kの呼吸は不思議に静かになつて、それと共に声まで薄れて行つた。喉の所で痰がせろ／＼いつた。彼はぎよつとして思はず立上つた。

これは、アメリカに留学中の主人公Aを、思想的にも生活的にも導いてくれた、社会主義者Kの臨終の場面である。若くして、道の半ばに倒れたKは、形見に時計をAに与える。動かない時計である。この時計も明らかにKの純粹持続・内部生命を象徴していると言えるであらう。その点は、先の二例と同様である。しかし、これは、「直せ……動く……」と言われている。R教授の時計が、もはや動くことのない時計であり、Aの時計がゼンマイを巻けば動くものであるのに対して、このKの時計は、修理すれば動くのである。Kは死んだ。しかし、彼の内部生命は、この先Aによつて受け継がれて行くはずのものであらう。

以上の三つの例では、いずれも時計のイメージが、それぞれの登場人物の内の時間、あるいは内部生命・純粹持続を象徴・暗示するものとして使われている。ここで注意すべきは、そのいずれもが「動かぬ時計」として描かれてゐることである。これは、作者有島自身における、自我の梗塞感の反映であると思われるのだが、この点は後に触れることにして、さらに他の例を見ておきたいと思う。

次の例は、「実験室」の一節である。科学を唯一無二の生活として生きてきた医師三谷が、妻の死因について主任教授と意見を異にしたために、その死体を解剖して、自分の主張の正しかつたことを実証した後、妻の胃袋の中に多量の血糊を発見する。これは、死の直前、咯血した妻が、沢山の血を吐いたものでは、それだけでも死んでしまふと言つて、その血を呑み込んでしまつたものであつた。そ

れを知つた三谷は、激しい衝撃を受けて、今までの、科学を第一とする価値観を根底から覆えさせてしまふ。

彼の妻の胃袋の中に凝固した血糊を見出した瞬間から、彼はこれまでの生活の空虚さをしつかりと感じてしまつた。實際をいふと妻の死因を実証した時にも、思ひあがつた誇りと満足との裏に、何処か物足りない不思議な感じがあつた。それを実証したとて、それが彼の妻との悲しい関係をどうする事も出来ないではないかと云つただけでは説明し足りないが、何かさういふやうな不満がすぐ頭を拾げてゐたのを彼は感じないではなかつた。さういへば、實際に熱中してゐた最中でも、或る重大な研究結果を発表する喜びに際会した時でも、よく考へて見るとそこには一味の物足りなさが附きまはつてゐた。さういへば、つと過去に遡つて、科学の研究に一生を委ねようと決心した時にも、彼は自己を或る程度まで殺してかゝる覚悟をした苦痛の覚えがあつた。六年間彼は、心の底のこの不平にやさしい耳を傾けてはやらなかつたのだ。而して強ひてそれがあつたべき事であると思ひなさんと努めてゐたのだ。白紙のやうな無益な過去を彼は眼の前の塵によつた冷やかな壁に見た。砂の上に立てられた三十年の空しい楼閣——それは今跡方もなく一陣の風に頽れてしまつた。彼の隻眼は抑へ切れぬ悲痛の涙を漉へてまじ／＼と実験室を見回した。

徒らに正確な懸時計は遠慮なくけうとい音に時を刻んでゐた。その音と、龍頭を流れ下る水の音とが、森閑とした真夏の暑い沈黙を静かに破つた。

この「徒らに正確な懸時計」は、前の三例とはまるで違ふ時計のイメージとして描かれてゐる。それは、主人公三谷の内部とは係わりのない、よそよそしい、外的・物理的時間を暗示するものともとれるし、この実験室を支配する科学主義の象徴ともとれるであらう。そして、それと対比的に描かれてゐる「龍頭を流れ下る水の音」が「自己」、あるいは「心の底の不平」を暗示するものであると思われる。この水音は、引用部分より少し前の箇所では、「龍頭から絶えず流れ出る水道の水だけが、たゞ一つすが／＼しい感じを彼に与へて音も軽く涼しかつた」と描写されてゐる。その爽やかな水の音に、三谷はいまはじめて気がついたのである。それこそが、三谷の内部生命・純粹持続であり、根源的自我であつたのだ。これまでの三谷は、「徒らに正確な懸時計」の方にばかり気を取られて、「自己を或る程度まで殺し」、「心の底のこの不平にやさしい耳を傾けてはやら

なかつた」のである。

同じような例が、有島の晩年の未完の長編「星座」の中にもある。作中の中心人物である星野清逸につぐ重要人物と思われる園が、例の、札幌農学校の時計台に登っている場面である。

夢中になつてシラーの詩に読み耽つてゐた園は、思ひもよらぬ不安に襲はれて詩集から眼を放して機械を見つめた。今まで安らかに単調に秒を刻んでゐた齒車は、急に氣息苦しさうにきしみ始めてゐた。と思ふ間もなく突然暗い物隅から細長い鉄製の棒が走り出て、眼の前の鐘を発矢と打つた。狭い機械室の中は響だけになつた。園の身体は強い細かい空気の震動で四方から押さへつけられた。又打つ……又打つ……丁度十一。十一を打ち切るとあとにはまた齒車のきしむ音が暫く続いて、それから元通りな規則正しい音に還つた。

余りの嚴肅さに園は暫く茫然としてゐた。明治三十三年五月四日の午前十一時、——その時間は永劫の前にもなければ永劫の後にもない——が現はれながら消えて行く……園は時間といふものをこれほどまじく——と見つめたことはなかつた。

心から後悔して園は詩集を伏せてしまつた。この学校に学ぶやうになつてからも、園には別れがたい文学への憧憬があつた。捨てよう捨てようと思ひながら、今までずく——とそれに引きずられてゐた。一事に没頭し切らなければ済まない。一人の科学者に詩の要はない。科学を詩としよう。歌としよう。園は読みなれた詩集を犠牲の如くに機械室の梁の上に残したまゝ、足場の悪い階段を静かに下りた。

この、園の目の前に「現はれながら消えて行く」時間は、やはり、外的・物理的時間であろう。その時間を見て、園は文学への未練を断ち切り、科学者に徹して生きようと決心する。この場合の文学とは、園の内部生命・純粹持続につながるものなのであるか。だとすれば、「実験室」の三谷の場合と同様になる危険が予想されるのだが、この作品が未完に終つてゐるために、それを確認することはできない。ただこの場面に続く箇所には次のような叙述が見られる。

廊下に出ると動物学の方の野村教授が、外套の衣囊の辺で癖のやうに両手を拭きながら自分の研究室から出て来るのに遇つた。教授は不似合な山高帽子を丁寧に取り、煤け切つたやうな鈍重な眼を強度の近眼鏡の後ろから覗かせな

がら、含羞むやうに、「ライプチツヒから本が少しとゞきましたから何んなら見に入らつしやい」

と挨拶して、指の股を思ひ存分はだけた両手で外套をこすり続けながら忙がしさうに行つてしまつた。何んのこだはりもなく研究に没頭し切つてゐるやうな後姿を見送りながら、園は何んとなく恥を覚えた。それは教授に向けられたのか、自分に向けられたのか、はつきりしないやうな曖昧なものであつたが。そして、作品の終末部にも、自らを鞭打つ園の自責の言葉が出てくる。

……科学の爲めに一身を献げようとするものに何んといふ不覚なことだ。昔から学者の生活が世の常の立場から見ても、淋しく暗いものであるのは知れ切つたことだ。それは始めから或る誇りを以て覚悟してゐたことではなかつたか。誰にも省みられないけれども、春が来る毎に黙つて葉を連ねてゐるあの榆の大樹、あの老木が一度でも分外的な涙を流したか。貴様にはまだ文学者じみたセンチメンタリズムが影を潜めてはゐないのだ。科学者らしい雄々しさを持て。真理の前には何事を犠牲にしても、微笑してゐられるだけの熱情を持つて。こういう部分には、依然として揺れ動いてゐる園の内面が窺われるのだが、それ以上のことは分らない。ただ、この場合、園の目の前に「現はれながら消えて行く」時間が、外的・物理的時間であり、園はそれを見て、文学への憧憬を断ち切る決心をしているのだ、ということを確認するに止める。

また、次のような例もある。

「何、たんとの儲けでもありませんが、昨夜の約束通り女にダイヤの五つや六つはおごつてやつていゝ位には這入りませう。是れで見えいらつしやい、この雲行きがや一昨日以上の恐ろしい暴風雨が今晚あたりはどつと押し来ますから。一つ何んですな日本中の稲の穂が擦れてくゝ擦り切れて、一つ残らず荒神帯のやうになつてくれりや占めたもんですがなあ。百姓が首をくゝつたつて、物価が騰貴したつて、かうなつて来ちや構つてはゐられません、背に腹は代へられませんからね。(中略)」

こゝまで滔々とまくし立て、から彼は胸中の毒塊を吐き尽したといふやうに満足な顔をして悠々と耳たぶを引つ張つた。成程空合は段々恐ろしくなつて来た。彼はやがてもう一度表水を一呑みに飲むと大きな金時計を出してパチンと音をさせたが、慌てゝ帰る挨拶を始めた。

「こりや大変もう十二時半だ。つい長話で御邪魔をしたはい、が、ナポレオンの大切な五時間が迫つて来ましたそれぢやこれで御免を蒙ります。(後略)」短編「『死』を畏れぬ男」の終末に近い部分である。この「『死』を畏れぬ男」は、金儲けに血眼になつてゐる相場師である。彼はいま、米の株を大量に買占めて、その暴騰による一攫千金を狙つてゐるのである。食うか食われるかという戦いをしている彼にとっては、一分一秒は勝負の分かれ目である。時間(この場合は、もちろん外的・物理的時間)を、いかに的確に捉えるかが、この男のすべてと言つてよい。当然、彼の内的・心理的時間は断片化し、内部生命は無視されている。ここに出てくる「大きな金時計」は、そういう彼を支配する、外的・物理的時間の象徴であらう。

次の例は、時計のイメージではないが、やはり、外的・物理的時間を示す叙述と思われるものである。戯曲「死と其の前後」冒頭の一節である。

死一時の流れに漂ふ小さな泡がまた一つ、小さな音を残してはじける時が来た。その用意をして置けよ。

そして、さらに、その少し後の部分にも次のようなセリフがある。

死一慰め合ふ事のできる間になぐさめ合ふがい。時はとどまらずに過ぎて行く。(影人に向ひ) お前達は行つて死なうとするものゝ用をたしてやれ。俺はこゝで静かに焰の戯れを見つめてゐるのだ。(やや暫く沈黙) 明日の朝、万物に命を与へると云ふ太陽が、新しい光で東の空から真夏の山や海をかがやかしく照し始める時、凡てのものが喜び勇んで命を讃美するその真唯中で、その若い女の小さな焰は燃えつくすだらう。凡ては同じ事だ。

これは、瀕死の床に横たわる妻と、それを看病する夫とを見ながら語られる「死」のセリフである。大きな鎌を持ったクロノスを連想させる、この「死」の言葉は、人間の内部や哀歎とはまったく無関係に流れ去つて行き、しかも人間の生き死にを押し難い力で支配している、外的・物理的時間の非情さ、よそよそしさを冷徹に物語っている。

以上の四例——三谷の実験室に掛かつてゐる「徒らに正確な懸時計」と、園の目の前で時を刻んでいく時計台の大時計、さらに、「死を畏れぬ男」の持つてゐる「大きな金時計」という三つの時計のイメージ、そして、「死と其の前後」を流れる「時の流れ」は、いずれも外的・物理的時間を象徴・暗示するものと考えよう。先に挙げた三つの例が、いずれも「動かぬ時計」のイメージで

あつたのに対して、この外的・物理的時間は、人間の内部生命・純粹持続とは無関係に、「徒らに正確」に、「とどまらずに過ぎて行く」のである。

有島武郎の小説に現われる象徴的・暗示的な時計のイメージは以上の如きものである。有島の二十七編余の小説のうち、これだけの数の特殊な時計のイメージは、やはり異例に多いと言つてよいであらう。これに、時間に関する叙述を加われば、その数はこれに倍するものとなるのである。ここに、有島の時間に関する関心の深さを読み取ることが出来る。先の例で見たように、一方では、人間の内的・心理的時間、あるいは内部生命・純粹持続を象徴・暗示する時計のイメージ、他方では、人間の内部とは係わりのない外的・物理的時間を象徴・暗示する時計のイメージ、この、人間に意識される二つの時間が提示されている。このような、有島の時間への関心は一体何を意味しているのか。以下、その点についてさらに考察してみたい。

二

今回、有島の作品を改めて読み返してみ、全体として最も印象に残つたのは、やはり「生命」に寄せる関心の深さ、というようなものであった。「やほり」と言つたのは、以前にもそれについて述べたことがあるからである(本誌第九号「『迷路』の位置」)。その中で、私は、「本能ないしは生命力に対する興味・信仰」という要素が、「『迷路』の竜骨の役割を担つて」おり、さらに、「『迷路』のみならず、有島文学の根幹を貫く最大のものは、まさしくこの生命力・本能に対する並々な興味・信仰であると言えよう。」と述べた。大筋としては、今もこれを改める必要を感じないのだが、厳密を期するとすれば、「生命力・本能」というのは、「内部生命・根源的自我」と言つた方が、より正確になると思われる。「内部生命」の動き、その発する力が、「生命力・本能」なのだ。有島自身、「惜しみなく愛は奪ふ」の中で、「本能は、全体的な而して内部的な個性の要求だ。」と言つてゐる。以下、「内部生命・根源的自我」という言葉を使おう。

有島文学のライト・モチーフ、それは、この「内部生命・根源的自我」の充実・完成、そして、そのことによる自由の獲得への希求であると言つてよいであらう。言い替えれば、「自由に流動し、飛躍する生命への渴望」ということにならう。

それは、すなわち、ベルグソンの「エラン・ヴィタル（生命の飛躍）」への渴仰といふことである。有島の代表作、「或る女」「カインの末裔」「宣言」「迷路」「生れ出づる悩み」などは言うまでもなく、「老船長の幻覚」「石にひしがれた雑草」「実験室」なども、それをモチーフにした作品であると言つてよいであらう。

では、なぜ有島文学のライト・モチーフがエラン・ヴィタルへの渴仰にあつたのか。それは、有島の内部生命・根源的自我があまりにも抑圧されてきたからであると考へられる。

余は生れてより今に至るまで、嘗て中心の要求の為に動きたる事なかりき。余は世間体の為に動きたり。若しくは人によく思はれんが為に動きたり。

これは、明治四十一年四月十八日の有島の日記である。このような慘憺たる自我の喪失状況に陥つていた当時の有島が、ベルグソンの思想を、大きな喜びをもつて受け入れたであらうことは想像に難くない。

それゆゑ結局、相異なる二つの自我があるわけであつて、その一つはもう一つの自我の云はゞ外的投射、その空間的な云はゞ社会的な表現であるわけである。第一義的な自我に達するのは深い反省によるのであつて、深い反省は内的状態を、絶えず形成の途中にある生きものとして把握させ、互に滲透し合ひ且その持続における継続が等質的空間に於ける並置と何の共通点もたない、尺度に従はない状態として把握させる。けれども、自己自身をかやうに捉へる瞬間はまれであつて、自由であることのまれなのはそのためである。大抵のときに我々は、自己自身に外的に生き、自我について色褪せたその幽霊、純粹の持続が等質的空間に投ずる影しか認めない。つまり、我々の生存は時間のうちによりもむしろ空間のうちに繰り延べられる。我々は我々に対してよりもむしろ外界に対して生き、考へるよりもむしろ語る。我々は自ら行動するよりもむしろ『行動される』。自由に行動するといふことは、自己を取り戻すことである。純粹の持続のうちに自己を置き返すことである。（『時間と自由』岩波文庫二二〇頁）

こういうベルグソンの思想に導かれて、有島ははじめて自己本然の要求を第一とする生活の糸口をつかむことができたのである。すでに『草の葉』によつて親しんでいたホイットマンの人格や生き方に、改めて大きな確信をもつて接近する

ことになる。ベルグソンの『時間と自由』を読んだのが、明治四十五年五月、「或る女のグリンパス」を執筆中のことであり、『創造的進化』を読んだのが、大正二年から三年にかけてのことと推定されている。それと踵を接するかのようにな、大正四年から次々と作品を発表し始め、大正五年の妻と父の死を契機として、翌大正六年の「カインの末裔」をはじめとする、爆発的ともいえる作品制作が行なわれる。長年抑圧されてきた有島の内部生命が、ベルグソンを梃子にして、一時に解放され始めたものと言えよう。以後、内部生命を抑圧せんとするすべてのものが、有島の反逆の対象となる。国家権力や社会、教会、家、制度習慣、そして自らの属する階級、さらには彼自身の性格、すなわちベルグソンのいう外的自我もまた反逆の対象となるのである。ライオネル・トリリングは、その著『自我の反逆』の中で、十九世紀の諸々の文学作品において、「牢獄のイメーヅ」が頻出することを指摘しているが、日本近代文学においては、北村透谷にその顕著な例があり、石川啄木や有島にも、それに近い認識があつたように思われる。「牢獄に閉じ込められた自我」を、全力を挙げて救出しようとする戦いがある。

このような、エラン・ヴィタルへの渴仰、魂の絶対的自由への希求は、しかし、現実の生活においては、そうたやすく達成できるものではない。ホイットマンならぬ有島においては殊にそうである。わずかに、北海道狩太農場の解放や、その最後の情死などに、有島の切なる希求の断片を窺い得るのみである。いきおい、その希求は、彼の文学作品の上に吐露されることになつたのである。大正九年以後の急激な落潮に至るまでの、有島のほとんどの作品を貫くライト・モチーフは、この希求にあつたと言つてよいであらう。

三

有島武郎の時間に寄せる関心の深さと、有島文学のライト・モチーフたる、エラン・ヴィタルへの渴仰というものを、第一節・第二節において見てきた。ここでは、両者がそれぞれ如何なる意味を持ち、如何に係わり合つてゐるかを考察してみたい。

まず、有島がなぜ時間に強い関心を持つてゐるのかを考へてみよう。

近来、にわかに時間に対する関心が高まつており、出版界はちよつとした時間

論のブームとさえ言うような状況であり、現代文学にも強い時間意識の反映が見られる。この、現代文学に反映している強い時間意識の由来について、ハンス・マイヤー・ホフは、三つの主要な要因を挙げている。（『現代文学と時間』研究社叢書）

①近代における「永遠性」の観念の消失。

②自然的時間の社会的絶対化による、経験的時間の断片化、そこから生じる自我の統一性・連続性の喪失、ひいては自我の解体意識の発現。

③歴史主義の挫折による、歴史の断片化・無意味化が時間の断片化を進めたと。

有島の時間に対する強い関心は、この第二の要因に基づくところが最も大きいであろう。「自然的時間」とは、先に見た外的・物理的時間のことであり、「経験的時間」とは、内的・心理的時間、ベルグソンの言う純粹持続のことである。これによっても、有島の時間に対する強い関心は、彼の自我の解体意識に結びついていることが分かる。有島の小説における内的・心理的時間は、いつも「動かぬ時計」のイメージによって暗示され、外的・物理的時間は「徒らに正確」に時を刻んでいく時計のイメージで暗示されている。R教授やAやKの時計はいずれも止まってしまっており、彼らの内部生命・根源的自我は、いま生きる力を失ってしまっている。また、三谷や「死を畏れぬ男」の時計は、「徒らに正確」に時を刻んでいるのだが、彼ら自身はすでに人間性を喪失してしまっている。このように描かれた人物や時計のイメージの中に、有島自身の自我の解体意識が強く反映されており、それからの脱出志向が、エラン・ヴィタルへの渴望となって、有島文学のライト・モチーフになったのと言えよう。

ベルグソンは、先に引用した文章の中で、「自由に行動するといふことは、自己を取り戻すことである。純粹の持続のうちに自己を置き返すことである。」と述べている。純粹持続、すなわち内的・心理的時間のうちに自己を置き返すことによつて、解体した自我・内部生命を再生させ、自由を獲得すること、それが有島衷心の希求なのである。「惜しみなく愛は奪ふ」の中には、次のような発言がある。

ベルグソンのいふ純粹持続に於ける認識と体験は正しく私の個性が承認するところのものだ。個性の中には物理的時間を超越した経験がある。意識のふりかへりなる所謂反省によつては摺めない経験そのものが認識となつて現はれ

出る。そこにはもう自他の区別はない。二元的の対立はない。これこそ本當の生命の赤裸々な表現ではないか。私の個性は永くこの境地への帰還にあこがれてゐたのだ。

「物理的時間を超越した経験」とは、外的・物理的時間の束縛から脱した、自分自身の内的・心理的時間、あるいは純粹持続の獲得、そして、その時間の中の自由な生命の流動と飛躍ということであろう。有島が本能的の生活と呼んだこの境地こそ、彼のあこがれてやまないものであったのだ。ホトイマンへの憧憬や、「或る女」「カインの末裔」などの制作も、その希求の表われと言えよう。同じく「惜しみなく愛は奪ふ」の中で、時間に言及した文章をもう一箇所だけ取り挙げてみる。

私は又本能的の生活の素材に近い現はれを無邪気な小児の熱中した遊戯の中に見出すことが出来ると思ふ。彼は正しく時間からも外間からも超越する。彼れには遊戯そのものの外に何等の目的もない。彼の表面的な目的は縦令一個の紙箱を造ることにありとするも、その製作に熱中してゐる瞬間には、紙箱を造る手段そのものの中に目的は吸ひ込まれてしまふ。そこには何等の努力も義務も附帯してはゐない。あの純一無雑な生命の流露を見守つてゐると、私は涙がにじみ出るほど羨ましい。私の生活があゝいふ態度によつて導かれる瞬間が偶にあつたならば、私は甫めて眞の創造を成就することが出来るであらうものを。ここには、外的・物理的時間から超越した小児の内部生命の自由な流動・飛躍が多くつたが、最後にいま一つだけ、これと同じような境地が描かれている。「生れ出づる悩み」の一節を抜き出して終りにしたい。

丁度人の肖像を描かうとする画家が、その人の耳目鼻口をそれぞれ綿密に観察するやうに、君は山の一つの皺一つの襞にも君だけが理解すると思へる意味を見出さうと努めた。實際君の眼には山の凡ての面は、そのまゝ凡ての表情だつた。日光と雲との明暗に彩られた雲の重なりには、熱愛を以て見極めようと努める人々にのみ説き明かされる貴い謎が潜めてあつた。君は一つの謎を解き得たと思ふ毎に、小躍りしたい程の喜びを感じた。君の周囲には今はもう生活の苦情もなかつた。世間に対する不安も不幸もなかつた。自分自身に対するおくれ勝ちな疑ひもなかつた。子供のやうな快活な無邪気な一本気な心……君の唇からは知らず／＼軽い口笛が漏れて、君の手は躍るやうに調子を取つて、紙

の上を走ったり、山の大きさや角度を計ったりした。

さうして幾時間が過ぎたらう。君の前には「時」といふものさへなかつた。

このように見てくるとき、自らの内的時間の豊かな流れと、内部生命の自由な流動・飛躍を求める有島の叫びは、現代の、時間と自我の断片化・切り売りを強いられている我々にとつても、等閑視できない問題を提起していると言えるであらう。

注1 有島の作品からの引用はすべて新潮社版全集によつた。漢字は新字体に

改めた。ルビは特別の場合を除いてすべて省いた。以下同様。

注2 安川定男『有島武郎論』による。

(本稿は、昭和五十一年度広島大学国語国文学会秋季研究集会において発表したものをもとにして、書き改めたものである。)